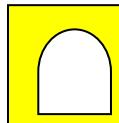


日吉台地下壕保存の会会報



第147号
日吉台地下壕保存の会

二年連続の紙上総会とコロナ禍と戦争遺跡

副会長 亀岡敦子

2020年春、今よりもはるかに新型コロナウイルス感染は少なかったが、もう集会を開くことが難しくなっていました。毎年6月に開かれる総会も、会報を通じての紙上開催とすることになり、まず議案書を載せた会報142号を送り、異議のある方、質問のある方はご連絡くださいと付け加え、異議がなかったので、次の会報143号で総会成立の報告をしました。その後の一年間の活動は、ほぼ休止状態でした。当然見学会も講演会もバスツアーも出来ませんでした。戦争遺跡保存全国シンポジウム東大和大会は、すっかり準備が整っていたにもかかわらず、苦渋の選択で一年延期を決めました。

一年経ったら少しは好転するだろう、2021年は通常に近い活動ができるだろうと、希望的な気持ちがありました。しかし、自分の意思でするはずの「三密を避けた自粛生活」を為政者の半ば強制でもう1年半続けています。それにもかかわらず2021年、コロナウイルス感染症はますます威力を増し、2年連続の会報による紙上総会とせざるを得ない状況になり、前号146号と今号147号で2021年度の総会の成立とします。会員の皆さんには、見学会も講演会もバスツアーも計画すらできずに、心から申し訳なく思います。いま唯一、この会を繋いでいるのは会報ですから、ご一読くださいますようお願いします。

また、戦争遺跡保存全国シンポジウム東大和大会は今号に載せたように、10月2,3日オンライン開催と決まりました。「第24回戦争遺跡保存全国シンポジウム東京 東大和大会」のHPから参加申し込みをすることができます。皆で集い、顔を合わせての全国大会こそ、意義があるはずですが、活動の質を低下させることなく、志は高く持って、戦争の実相を知るための大会にしたいものです。

私たちの会は、日吉台地下壕を起点に、戦争遺跡とかかわってきました。それはアジア太平洋戦争と向き合うことであり、そのまま当時の日本社会、為政者、軍部、市民の実態を知ることに他なりません。少し勉強してみると、いかに当時の政治家も軍上層部も無為無策で無責任だったか、はっきり分かります。将兵の命のかかった作戦ですら何となく決まり、正確な情報を拒否し自分の都合の良い情報にしがみつき、現実を直視せず、不都合を隠して言葉を言い換え、状況が変わっても方針を変えようとはしない。そして戦時下の国民は、従順に我慢強く、「お国のために」監視密告社会を作り上げました。

【目次】

- 巻頭言【1-2p】 二年連続の紙上総会とコロナ禍と戦争遺跡 副会長 亀岡敦子
- 報告【2-4p】 第33回日吉台地下壕保存の会・定期総会
- お知らせ【4-6p】 第24回戦争遺跡保存全国シンポジウム東大和大会 大会概要
- 連載【6-11p】 ※オンラインでの開催となります！
- ☆日吉第一校舎ノート(22)『若き日の詩人たちの肖像2』 会長 阿久沢武史
- ☆設備アレコレ(31) レイテ沖海戦での戦艦大和通信室 運営委員 山田 譲
- ☆海外の戦跡めぐり(17)バターンの戦闘 比共和国 運営委員 佐藤宗達
- 秘話【12p】 汪兆銘の墓の跡 運営委員 佐藤宗達
- 港北今昔こぼれ話【12-13p】 俳優・井上正夫と日吉、そして高橋誠一郎 副会長 亀岡敦子
- 新刊本の紹介【13p】『なぜ戦争体験を継承するのか - ポスト体験時代の歴史実践』 運営委員 遠藤美幸
- 聞き取り【14-16p】 特務艦浮島丸乗組み元電信兵 小野寺和一さんのお話 運営委員 山田 譲
- 活動の記録【16p】 2021.6~8

いま、世界中を覆っている新型コロナウイルスに、医療先進国のはずの日本で、入院できない状態を、自宅療養と言い換えて治療も受けられないまま亡くなる人もいます。それなのに、2つの嘘から始まったオリンピックが開催されました。80年前のこの国の為政者の姿と国民の姿は、まともなコロナ対策を持てない現在の日本とまるで合わせ鏡のようです。1年8ヶ月、私達は冷静にこの国のリーダーの本質と私たち自身の本質を見てきました。これはどう生かすのか、どういう社会を次世代に繋ぐのか、私たち一人ひとりに課せられた宿題ではないかと思います。

報告

第33回日吉台地下壕保存の会・定期総会

☆2020年度活動報告

◇会員数：個人 298名 交換・寄贈団体：94団体

◇第32回定期総会：

2020年6月13日(土)発送の会報142号にて議案書提出

2020年8月21日(金)発送の会報143号にて議案書ご了承の報告

◇運営委員会開催：2020/7-12 5回

2020年度 決算報告

(単位 円)

費目	2020年度予算	2020年度決算	備考
【収入の部】			
会費	300,000	257,320	188名
見学会資料代	500,000	0	
図書等頒布	100,000	0	
寄付金等	0	18,797	
ガイド講座受講料	0	0	
緑越金	548,875	548,875	
計	1,448,875	824,992	
【支出の部】			
運営費	160,000	65,194	各種会合・打ち合せ等
事務費	120,000	38,915	事務用品費等
印刷費	100,000	64,850	会報・資料等
通信費	300,000	239,197	会報送料等
図書資料費	100,000	0	参考書籍・販売書籍
交流・交通費	100,000	16,000	全国集会・各平和展賛助金等
謝礼	80,000	10,000	講演・学習・調査等
冊子作成費	200,000	0	
予備費	288,875	0	
小計		434,156	
差引残高		390,836	次年度緑越金
計	1,448,875	824,992	

以上の通り報告します。

2021年5月10日

日吉台地下壕保存の会

会計 亀岡 敦子



会計監査 熊谷 紀子



会計監査 山口 國子



この報告により収支を監査したところ、適正に処理されていることを認めます。

◇会報発行：4回 142号

(2020.6.13)-145号(2021.3.19)

◇地下壕見学会：2020/11-12 2回
124人

◇ガイド学習会：

2020/9 ギャラリー&スペース弥平
2020/11 箕輪町集会所
2021/3 日吉地区センター

◇第25回2020平和のための戦争展
in よこはま：神奈川県民センター
2020.10.10(土)特別企画「核・宇宙・環境」 11(日)：特別企画

「戦争・空襲」今回、展示は無くホールでの講演のみ。コロナ対策のため定員をホール収容人数半分の130名としました。両日共、定員一杯の参加がありました。朗読劇の日吉台中学校演劇部の皆さんには出演後退出。

◇第14期ガイド養成講座

2020.10.3(土)第2回 慶應キャンパス外周フィールドワーク。当初、3月予定であったがコロナ下で延期となっていました。地上の戦争遺跡を中心として、更には日吉キャンパス内及び周辺にある古代・中世・近世の遺跡も含めたコースを実施。参加者は受講生3名とガイド5名。

2020.11.7(土) 第3回 戦争体験を聞く(箕輪町集会所にて)

「東京大空襲・亀戸にて」二瓶治代さんよりお話をいただきました。

2020.12.5(土) 第4回(日吉地区センター中集会室にて)ようやく第4回を終了。受講者3名に亀岡副会長から修了証をお渡しすることができました。

◇小池汪写真展「戦後75年 戦争暮らし」(川崎市平和館)

2020.10.7(水)~30(金)当会も協賛。

◇2021.2.25(木) 日吉台小学校の出前授業の打ち合わせ(日吉地区センター中集会室)
日吉台小学校先生方との打ち合わせ(日吉台小学校)

◇2021.3.1(月) 授業「日吉台地下壕」日吉台小学校6年生88名(日吉台小学校体育館)
 パワーポイントで説明。ガイド6名が参加。

☆2021年度 予算(単位 円)

費目	2021年度予算	備考
【収入の部】		
会費	300,000	
見学会資料代	500,000	
図書等頒布	100,000	
寄付金等	0	
繰越金	390,836	
合計	1,290,836	
【支出の部】		
運営費	160,000	各種会合・打ち合わせ等
事務費	120,000	事務用品費等
印刷費	100,000	会報・資料等
通信費	300,000	会報送料等
図書資料費	100,000	参考書籍・販売書籍
交流・交通費	100,000	全国集会・各平和展賛助金等
謝礼	80,000	講演・学習・調査等
冊子作成費	200,000	
予備費	130,836	
合計	1,290,836	

収入の部の会費は前年度実績をもとに計上しました。 2021年6月18日

日吉台地下壕保存の会 運営委員会

☆2021年度日吉台地下壕保存の会

運営委員・会長・副会長・会計監査・顧問

会長 阿久沢 武史

副会長 亀岡 敦子

喜田 美登里

羽田 功

運営委員 石橋 星志

上野 美代子

遠藤 美幸

岡上 そう

岡本 秀樹

岡本 雅之

小山 信雄

佐藤 宗達

佐藤 由香

田中 剛	谷藤 基夫	福岡 誠
宮本 順子	茂呂 秀宏	山田 譲
山田 淑子	渡辺 清	

会計監査 顧問	熊谷 紀子 櫻井 準也	山口 園子 鮫島 重俊	中沢 正子
---------	-------------	-------------	-------

☆2021年度 活動方針

新型コロナウイルスの影響で、今年度も会の活動が大きく制限されることが予想されます。このような中でも、出来る限りの活動を継続していきます。感染防止対策を徹底しながら、運営委員会の定期的な開催、見学会のガイドや学習会、資料集の作成などを進めます。

昨年度は日吉地区の小学校に出向き、地域の歴史学習や平和学習の一環として日吉台地下壕を解説しました。壕内の見学ができない中での新しい試みでもありました。これまでの聞き取り記録をまとめた「日吉台地下壕保存の会資料集2」の完成に向けて準備も進めています。

以上のように、2021年度の活動は新型コロナウイルスの影響を受けることが想定されますが、活動方針および予算案は例年と変わらない内容とし、以下のように提案します。

活動方針

- 文化財指定早期実現を文化庁・神奈川県・横浜市に働きかけ、地下壕を保存する。
- 慶應義塾・横浜市・神奈川県・国への働きかけを、港北区民をはじめとする地域住民と協力して行う。
- 小・中・高校生及び広く一般市民などに対して平易でわかりやすい見学会を実施する。
- 戦争遺跡保存全国ネットワークの会員団体として、全国的な保存活動に参加する。
- 日吉台地下壕見学会の内容をより充実させるために、ガイド養成講座・講演会・学習会を開催し、運営する。
- 横浜・川崎平和のための戦争展を開催する。
- 神奈川県内の他団体と連携し、日吉台地下壕についての展示や講演を行う。
- 日吉台地下壕の調査・研究を深める。
- 運営委員会の活動をより一層充実させる。

お知らせ

第24回戦争遺跡保存全国シンポジウム東京 東大和大会 大会概要

戦争遺跡を活用し、平和の思いを伝えよう

～戦争被害者・加害者とならないために～

本大会は新型コロナウイルスの感染予防を考慮し、オンラインでの開催となります。

【主 催】 戦争遺跡保存全国ネットワーク

第24回戦争遺跡保存全国シンポジウム東京 東大和大会実行委員会

【共 催】

東大和・戦災変電所を保存する会/浅川地下壕の保存をすすめる会/武藏野の空襲と戦争

遺跡を記録する会/陸軍少飛平和祈念の会/八王子平和・原爆資料館/731 部隊遺跡世界遺産登録を目指す会/調布飛行場の掩体壕を保存する会/軍医学校跡地で発見された人骨問題を究明する会/戦場体験放映保存の会

【後援】

東大和市・東大和市教育委員会/東京都建設局西部公園緑地事務所/公益財団法人たましん地域文化財団

1. 趣旨

当初、本大会は、2020年8月の開催予定でしたが、新型コロナの感染拡大の為、残念ながら延期せざるをえず、2021年10月の開催になりました。現在、戦後76年。「戦後生まれ」世代は2018年10月で総人口の85%を超える（総務省統計局「人口推計」より）。逆に空襲体験がある、戦争の記憶がある世代は1割を切ったといわれ、戦争体験者から直接その貴重な体験を聞くこと自体が極めて困難になっています。そのため戦争体験のない者が次世代に伝える新しい継承の取り組みが必要とされ、いま全国で様々な試みがなされています。その意味で、戦争遺跡・遺構、遺物などは、リアルな戦争の記憶を伝えることが出来るものとして益々重要になってきています。

東大和市は、東京都多摩地区にある東西5.3km南北4.3kmの自然に恵まれた住宅地が広がる町です。当市を含む多摩地区は戦前、軍事施設や航空機産業が集積した首都防衛の「空都」と呼ばれた地域です。東大和市（当時は大和村）にも1938年東京瓦斯電気工業株式会社（翌年に国策として日立航空機株式会社に改編）が大田区（当時は大森区）大森から移転、航空機エンジンの生産を行っていました。その為、三度にわたる米軍の空襲を受け、多くの死傷者を出しています。

戦後は都心のベッドタウンとして多くの人が移り住んで、現在人口8万5千人、公民館を中心とした市民活動も活発です。1981年には公民館講座「太平洋戦争と郷土」に参加したひとたちが、空襲を体験した市民の体験談を書き記して、戦争体験を後世に残す活動を始めました。そして、講座で初めて日立航空機の被弾した変電所や給水塔の存在を知り衝撃を受け、その保存を求めて市議会に陳情するなど、市民にこれらの建物の重要性を訴え、その後の官民一体となった東大和市での戦争遺跡の保存運動のまさに先駆けとなりました。

しかし、その後の東大和市の2つの戦争遺跡の足跡は大きく異なります。傷だらけの姿をそのまま残す形で変電所は保存されるに至り1995年には東大和市の指定文化財になりました。一方、変電所と同様に被弾した給水塔は、土地所有者の企業との価格交渉が折り合わず2001年に残念ながら取り壊されました。保存運動の明暗を示し、遺跡を残すことの困難さを次世代へ伝える教訓的な出来事でした。

現在、東大和市は、2021年7月末完了予定で1年かけ約1億3千万円の予算で2回目の大規模修繕工事を行っています。修復された戦災変電所は、8月下旬には一般公開を予定しています。平和の尊さ、戦争の現実を伝え、次世代へつなぐ存在としての戦災変電所でお会いすることを願い「戦争遺跡を活用し、平和の思いを伝えよう」とのテーマで「戦争遺跡全国シンポジウム 東京 東大和大会」を開催します。

2. 日程

10月2日（土） 全体会 10時00分 開会 （14時30分 終了予定）

- 主催者挨拶 東京 東大和大会実行委員長 小須田 廣利
- 歓迎挨拶 尾崎 保夫 氏（東大和市長）
- 基調講演 人間文化研究機構国文学研究資料館
准教授 加藤 聖文（きよふみ）氏 テーマ「戦争の記憶から記録へ」
- 基調報告 戦争遺跡保存全国ネットワーク共同代表 出原 恵三

○ 地域発表

「多摩地域の戦争遺跡」浅川地下壕の保存をすすめる会事務局長 齊藤 勉

「大規模修繕後の旧日立航空機変電所の紹介」東大和市・戦災変電所を保存する会

○ 閉会挨拶 戦争遺跡保存全国ネットワーク共同代表 十菱 駿武

10月3日(日) 分科会 10時00分-15時00分(12:00-13:00は昼食となります)

○ 今回は従来のように3分野に分かれての分科会ではありません。

○ 報告は初めての試みですがzoomで行われます。

○ 報告者は7人を予定していますので、是非ご参加ください。

3. 参加費 : 両日全体で 一般 2,000円 大学院生・大学生 1,000円 高校生以下無料**4. オンライン大会の参加申込の方法**

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、第24回戦争遺跡保存全国シンポジウム東京東大和大会は、ビデオ会議システムZoomを使ってオンラインで開催いたします。

参加申込には、下記の☆ホームページ(HP)に大会申込ページが設置されていますので、該当ページより必要事項に記入して送信願います。参加申込をされたアドレス宛に自動的に参加申込書のコピーが届きます。もし、届かない場合は、アドレスに不備がある可能性がありますので再度送信願います。なお、紙ベースでの参加をご希望の方は、HPに申込書がありますので、以下要領にてお申込みください。

☆HP (<http://24senisekishinpo.nikita.jp>)

☆郵送にて申込ご希望の方

上記HP▶大会申込書▶申込書(郵送用)▶ダウンロードして記入の上お送りください。

連載**日吉第一校舎ノート(22)****『若き日の詩人たちの肖像』(その2) 会長 阿久沢 武史**

学校は、なんということもなかった。少年が入る前年に、予科生は髪の毛を切れ、坊主頭になれ、つまりは兵隊頭になれという命令が出て、文学部の学生たちが反対をしてストライキをやった、ということであったが、少年も不愉快には思うものの、学校も学校なら、と深く軽蔑していた。そうしてこういう下らない命令を、他の大学に先がけて出した、自身の保証人であるKという学長を、心の底から軽蔑していた。手前が美男子気どりでふさふさと髪を伸ばしているながら、学生にだけは兵隊頭になれという、何が自由主義者だ、手のうちは見えているぞ、とツバでも吐きたいほどの気持で軽蔑していた。(『若き日の詩人たちの肖像』(上) 集英社文庫、引用は以下同)

堀田の生家は富山県高岡市伏木港で代々廻船問屋を営む旧家であり、父は慶應で学び、塾長小泉信三の同級生だった。その縁で小泉が保証人になるわけだが、堀田の在学中に家業は傾き、彼の青春は没落の影を色濃く背負うことになる。小泉は日吉開設の翌年にいわゆる断髪令を出し、予科生に短髪を強いた。入学仕立ての少年は、希望に胸を膨らませて学び始めたというより、そのまなざしは冷ややかである。

とりわけW大学との野球があった日の夜、銀座で酔って大きわぎをする同じ大学の学生たちというものは、反吐をはきたくなるほどいやなものだった。世間に甘ったれて、なんだと思ってやがるんだろう、としか思えないのだ。(中略) これがいったい、その学校の名をかぶせて、ナントカボーイとか称される、おしゃれで洗練されているとかということになっている連中なのか、とつくづく反吐をはきたくなるような気持にお

ちいといったことがあった。

夏休みが近づいた頃、少年は何気なく入った青山の古本屋で、薄青い背に金文字で「LENIN」と記された洋書を手にした。ロシア革命時に、レーニンの近くにいたアメリカ人によって書かれた追想集で、レーニンに関する逸話が記された本である。読み進めるごとに「異常なほどに現実性と具体性」をもって少年の眼をひらいて行った。むろんそうした書籍を読むことが十分に危険だと認識されていた時代である。そして彼は最初の夏休み、故郷で英訳の『レーニン選集』に没頭する。

語学が堪能な彼は、予科の授業では英語とドイツ語が好きだった。ある日、同級生の二人が学校でドイツ語の授業中に呼び出され、そのまま警視庁に送られるという出来事に遭遇する。そのうちの一人は地下の留置場で急性肺炎になり、死んでしまうのである。

そのとき、警察は教室へじかに顔を出したわけではなかったが、彼らの二人がそろって呼び出されたということは、それだけすでに事態が何であるかを物語っていた。二人の顔色は、転瞬の間に白々と、粉をでも吹いたかのように青ざめ、目がしらで彼らは級友のすべてに訣れを告げて行った。クラス担任のドイツ語の教師が、これも一瞬凝然と立ちすくんでいたが、やがて、無言で、びくりとからだを二つ折りに折って机に両手をつき、頭を垂れた。長い髪の毛がばらばらと崩れ落ちて来た。しかし、それも一瞬のことで、本も何も机の上に放り出して廊下へとび出して行った。人気のない廊下に、高い靴音が、うつろに響いた。

「何だ、どうしたんだ！」

と学生の一人が甲高く叫んだが、誰も何も言わなかった。言わなくても、事態はすでに明瞭だった。

十分ほどして教師が戻って来た。眼を伏せて、首を垂れたまま、しばらく教壇に立っていたが、やはりひとことのことばも言わずに、のろのろと本をかたづけ、黙ったまま教室を出て行った。ドアを引きぎわに、教師は握り拳で眼を拭い、叩きつけるように、大きな音をたててドアをしめて行った。彼は教え子を、その授業の現場で奪われた。

「理想的新学園建設」を掲げて日吉が開設されたのが昭和9年(1934)、中條精一郎や網戸武夫が「学びの空間のロマン」を願い、世界地図のカップで海外への飛翔の夢を表現しようとしたこの校舎は、その二年後には国家権力によって学生が教室から連れ去られる空間になっていた。教師も学生も無力であり、「何だ、どうしたんだ！」と叫ぶしかない教室に、

「時代」という名の重いドアが叩きつけられるよう閉められる。この出来事が事実だとするならば、それもまたこの校舎の持つ重い「記憶」であり、いまを生きる我々は、そうした「記憶」をしっかりとと思い出し、見つめ直さなければならないだろう。この白くて大きい校舎でいったい何があったのだろうか。

本稿は『慶應義塾高等学校紀要』第47号(2016年)に発表した拙稿「日吉第一校舎ノート(三)予科の教育(前編)」の再録となります。

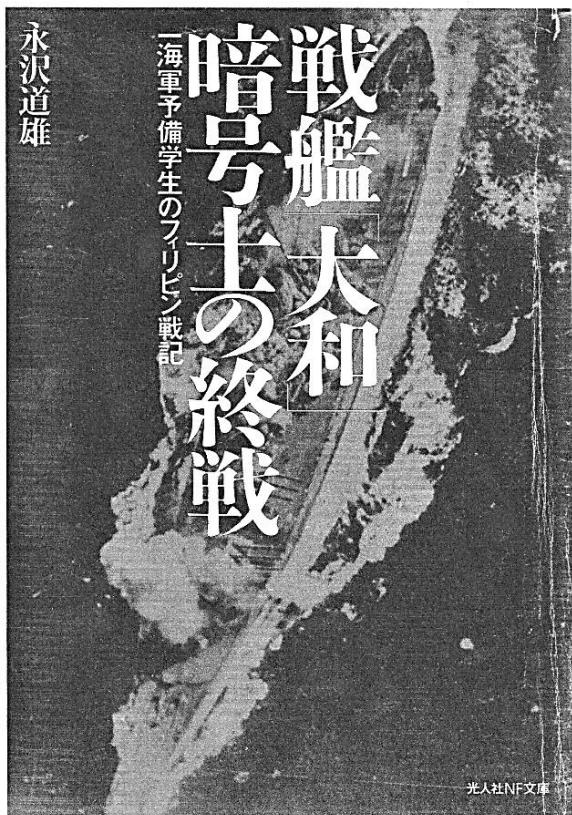
連載

設備アレコレ(31) レイテ沖海戦での戦艦大和・通信室 —無線電話で通話、電信も平文使用

運営委員 山田譲

《出典》 『戦艦「大和」暗号士の終戦』 永沢道雄著 2003年、光人社NF文庫
(『不戦兵士』 小島清文 1995年、朝日ソノラマ刊を改題)
『栗田艦隊』 小島清文著 1979年、図書出版社刊

①慶應出身の「予備学生」として徴兵された小島清文氏



小島清文氏は慶應大学経済学部卒で徴兵され海軍に入隊。「予備学生」(学生出身の予備将校。軍事教育後、いったん予備役となるが即座に召集で少尉任官)として暗号士官となり、戦艦「大和」に乗艦して1944年10月のレイテ沖(フィリピン沖)海戦に参加しました。この海戦で連合艦隊は大敗北・事実上壊滅し、小島氏は呉軍港に帰港しましたが、直後にフィリピン・ルソン島の航空基地に転属させられました。米軍の進攻を受けて部隊は山中をさまざまいましたが、小島氏は勇気をもって敗戦以前に部下を率いて米軍に投降しました。戦後、氏は不戦兵士の会メンバーにもなり、日吉台地下壕保存の会とも親交がありました。

上記2冊は、小島清文氏への聞き取りを朝日新聞編集委員の永沢道雄氏がまとめたものと、小島氏自身が書いた回想記です。ここでは当時の艦隊内と艦隊相互、連合艦隊司令部との通信の実際がわかる記述を抜き出して紹介したいと思います。なお()内は山田の補注です。

レイテ沖海戦は、マッカーサー率いる米軍がレイテ島に上陸作戦を開始した中で、これを阻止しようとした連合艦隊最後の大戦(作戦名・捷1号)でした。主力の

栗田艦隊は戦艦「大和」「武藏」をふくむ大部隊で、ボルネオ島・ブルネイを出港し、レイテ島北方のサンベルナルジノ海峡を東に抜けて南下し、東側からレイテ湾の米軍艦船を攻撃する。同じくブルネイを出港した西村艦隊はレイテ島南側のスリガオ海峡を抜けて、西側からレイテ湾に向かう。台湾沖から南下する志摩艦隊は西村艦隊に後続し、レイテ湾を攻撃する。他方、小沢治三郎率いる空母4隻の機動艦隊は、米軍空母部隊を北方に引きつけるオトリ部隊として、フィリピン北東の海上で陽動作戦をする。

この複雑で大規模な作戦のためには、艦隊相互、各艦隊内、連合艦隊司令部との通信連絡が不可欠です。小島氏の乗艦「大和」は栗田艦隊の旗艦となり、暗号士官という立場上、この通信連絡の全容を知る立場でした。ですので、この2冊の本には実際の通信の実例がたくさん書かれています。これらの通信は、その多くは日吉の地下通信室で電信兵が実際に受信し、また日吉から船橋送信所などを経由して送信されたものです。なお文中の「平文」とは、暗号文と逆に暗号化されていない通信のことです。

②暗号解読は学生出身者が得意

「暗号には一般艦船用の呂暗号、飛行機用の登暗号、緊急作戦用暗号などがあったが、主として呂暗号」。これは5桁の数字で「暗号士(暗号士官)は5つの数字のうちで1つや2つの誤受信や欠字があっても何とか翻訳できるよう日頃から訓練を受けており…通信学校出身の暗号士や通信士たちは、海軍兵学校(正規の将校養成校)出の少・中尉が投げ出した虫食い電報を苦も無く翻訳するという離れ業は、しゃば気が多く想像力豊かな学生出身予備少尉たちの特技だった。彼らは信号もモールスもよくわからないが暗号翻訳だけは別だった。」

「大和」の電信長は田中大尉。小島少尉の寝室は艦橋下の上甲板。暗号翻訳以外に電話班も担当した。その班長は小林二曹。電話班の兵士は志願兵が多くかった。

「大和」の通信室は上甲板前部にあり、2つに分かれて右側が電信室、左側が暗号室。暗号室後部に電話室。戦闘が開始されれば各艦の連絡は電話と旗旗(信号旗)による。暗号士の役目は軍機、軍機密などの親密電報の翻訳で、兵には一切まかせられぬことになっていた。

③作戦命令受信、戦闘開始、艦隊内の通信は無線電話で音声通話

8月4日連合艦隊司令部から「機密G F命令作第85号」受信=捷1号作戦の要領を指示。電信室でデリー放送をよく聞いた。海軍中央部が味方にも隠しているデータがわかる。

10月17日レイテ島入口(東方)のスルアン島の海軍見張り所から平文で「敵戦艦2、特設空母2、駆逐艦が接近」「敵は上陸を開始せり。天皇陛下万歳」と電報を打って消息を絶った。

10月18日午後、連合艦隊参謀長から機密電。夜に「捷1号作戦発動」を受信。

10月22日午前8時、ブルネイ出撃。艦長・森下信衛少将、第一戦隊司令官・宇垣纏中将。

旗艦「愛宕」の特信班・佐々木洋次少尉(慶應出身、米国育ち)が、受話器で米潜水艦の緊急通信を傍受「0800 敵戦艦大和以下約30隻ブルネイ出港。進路北。速力18ノット」

10月23日5:20、「愛宕」から「敵潜水艦の感度極めて大」の警告。

電話室・小林二曹「愛宕に魚雷4本、高雄に2本命中です」。「愛宕」から「ワレ航行不能」「高雄」から「ワレ最大速力8ノット…6ノット…ワレ航行不能」「愛宕沈没」

8:20、栗田長官より第1戦隊司令官宛電文「本職は大和に移乗予定。」

「愛宕」乗組み佐々木少尉「敵潜水艦が相互に連絡をとりながら攻撃態勢をとろうとしているのがわかったので参謀に報告したのにとりあげない。敵は生の英語でお互いに話し合っていたから、こっちには全部わかつっていたのだ。あいつら予備学生出身のわれわれを馬鹿にしてやがる。」「敵はわれわれがブルネイを出た時からずっと接触していたのだ。」

10月24日6:50、西村艦隊「最上」の水上偵察機がレイテ湾上空で敵情打電。「0700、敵の兵力は戦艦3、巡洋艦3、駆逐艦6、輸送船80以上碇泊中。スルアンの267度50分」

(0700は7時00分。0度は真北で以下右回りの角度表示、この角度はほぼ西方)

9:30頃、基地航空部隊の索敵機から敵機動部隊に関する第1報。「空母をふくむ敵部隊見ゆ。空母4、地点ホヲ0ヲ。その他約10隻、進路東」(地点は暗号で送信)

10:08、「能代」「大和」電探室、敵編隊探知「右15度、敵大編隊。左へ進みます。」

「武藏」から無線電話「我れ被雷するも航行に支障なし」

重巡「妙高」より「右舷艦尾に被雷。ワレ最大速力15ノット」

第33特根(特別根拠地隊)からレイテ方面の敵情通報「1032、2航艦932空の偵察によれば24日0630 ドラグ東方5カイリ、戦艦4隻、巡洋艦4隻、同10カイリ輸送船80隻、付近に戦艦5~8隻、巡洋艦10隻、湾内に駆逐艦遊弋中、ミンダナオ海(タクロバンの60カイリ南方)魚雷艇10隻ドラグの南40カイリ、中型商船10隻繫留中、水上母艦1隻、駆逐艦3隻遊弋中」(ドラグ、タクロバンともレイテ湾奥の米軍上陸地点、1海里は1852メートル)

13:12、栗田艦隊より小沢機動部隊あて問合せ電「貴隊接触並びに攻撃状況速報を得たし」

実際には午前11:38に小沢艦隊発信「機動部隊本隊1145地点ヌア2シ。攻撃隊全力、地点フシ2カの敵機動部隊を攻撃す」——「大和」では着信せず、小島も見ていない。「利根」では受信。激しい空襲下での受信不良ではなかつたかと小島はかんがえている。

午後、「大和」より「武藏」に無線電話「鳳2(オオトリフタ)、鳳2。こちら鳳1。47ワカバ、47ヨド」(武藏へ、こちら大和。感度5。そちらいかが?)——その後、「武藏」沈没。

14:39発小沢艦隊からの通信「前衛は南方に進出、好機に乘じ残敵を攻撃撃滅すべし…

1500ごろ偵察機2機をして日没ごろまで地点フシ2タ付近の敵に接触せしむ…」

④栗田艦隊反転するも再度東進、西村艦隊全滅、志摩艦隊戦場離脱

17:30連合艦隊司令部あて電報「一時敵機の空襲圏外に避退し友隊の成果に策応し進撃するを可と認めたり。1600シブヤン海、進路290度」(西方向へ後退)

19:00頃、連合艦隊司令部より緊急電報「天祐を確信し全軍突撃せよ」

艦隊はそのすぐあと再反転し、20ノットに速度を上げて東へ向かった。

22:13、西村艦隊から連合艦隊司令部宛「…第1遊撃部隊主力は全滅を賭しタクロバン泊地に突入、敵部隊を殲滅せんとす。」

10月25日午前2時すぎ、西村艦隊より「0130 スリガオ海峡通過…魚雷艇数隻ほか敵情不明」

3:30頃、「敵らしき艦影見ゆ」「味方駆逐艦2隻被雷、遊弋中。山城被雷。」

30分後、志摩艦隊から電文「第2遊撃部隊戦場到着」

5時すぎ、志摩中将から「当隊攻撃終了。一応戦場離脱」10分後「第2戦隊(西村艦隊)全滅す。我れスリガオ海峡を西回り索敵しつつ帰投す」

*小島氏の注記

夜が明けて…アメリカの駆逐艦が戦艦「山城」の沈没現場にやってきて生存者を救助しようとしたが、日本兵はいずれも救助を拒んだので去っていった。(生存者・関山氏の話)

(志摩艦隊は) 素早い退却だった。…志摩艦隊の反転で、多くの人命が救われた。

⑤栗田艦隊、米軍護衛空母部隊を捕捉攻撃、そのあと「謎の」反転退却

6:45、大和より発信「敵空母らしきマスト7本見ゆ。我よりの方位125度、距離37キロ」交戦第1報を発信「0702、敵機動部隊と交戦中。地点ヤルマ41。第3部隊は合同せよ」

「熊野」と「鈴谷」から被害報告の電信。

7:30、栗田長官下令「各隊全力を挙げて進撃せよ。進撃方向100度」

各艦は平文の無線電話で連絡。「大和」では各艦との通話状態が不良。

11時頃、「大和」からの発信「我が地点ヤヒマ37。進路南西レイテ泊地に向う。北東30カイリ、空母を含む機動部隊および南東60カイリ大部隊あり」(幻の敵艦隊—実在せず)

11:50すぎ発信、依頼電「ヤキ1カの敵を攻撃されたし」(フィリピンの航空基地向け)

12:15、小沢艦隊から電報「大淀に移乗、作戦を続行す 1100」

「利根」より「大和」に緊急平文電報「レイテ湾内に敵艦、輸送船、病院船多数あり、絶好の攻撃の機と認む」

「利根」の電信兵は「大和」が間違いなく受信したことを報告し「あの諒解という打ち方は、彼に間違いありません」と答えた。電信兵はそれぞれ送信機を叩く際にくせがあり、お互いにいつも訓練を通して相手電信兵のくせを熟知しているから、あの打ち方を聞けば「大和」が受信したのは間違いないという。しかし反転命令が「大和」から届いた。

12:30すぎ、栗田長官より打電「第1遊撃部隊はレイテ泊地突入をやめ、サマール東岸を北上し敵機動部隊を求める決戦、爾後サンベルナルジノ水道を突破せんとする」

14:30、小沢長官からの戦闘速報を受信「0830より1000まで敵飛行機約100機の来襲を受く。戦果撃墜数10機、被害秋月沈没、千歳、多摩落伍。瑞鶴通信不能」

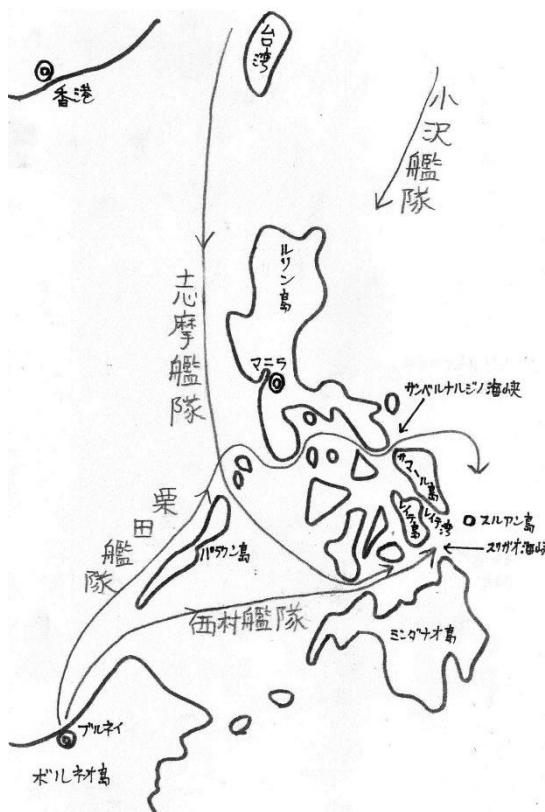
午後6時すぎ、連合艦隊司令部から電命「機動部隊本隊、第1遊撃部隊は補給地へ向かえ」

10月28日夜9時すぎ、ブルネイ帰着。11月24日午前8時、「大和」は母港呉に帰港。

栗田艦隊に配属された予備学生24人のうち6人が戦死し、生き残りはほとんど外地に出された。同じ士官でも海軍兵学校出は全部内地勤務になったと後で聞いた。

*栗田艦隊反転への小島の推理

「ヤキ1カ」の敵艦隊攻撃依頼電は虚報でなく嘘としか考えられない。小沢長官の「大淀」移乗を知り、



ハルゼー艦隊が急速南下してくるという危機感をもち、栗田長官は退却の意思を決定したのだろう。全滅覚悟でレイテ湾へ突っ込むか、退却するかの二者択一だった。栗田長官たちは人間的で合理的判断をした。西村艦隊は突進して全滅。志摩艦隊はさっさと戦場離脱。(栗田長官は)動搖をかさね、結果は大多数の将兵の命を救った。作戦そのものが、失敗しても仕方ない無理な前提で組み立てられていた。栗田艦隊は夜9時半、無事にサンベルナルジノ海峡を通過。危機一髪の脱出だった。

(付)『元軍令部通信課長の回想』鮫島素直著(昭和56年、同書刊行会刊)によれば、

- ①戦艦の無線兵装標準は、中波の2号(91式)無線電話機2台。空母、巡洋艦、駆逐艦も同じ。その他、90式無線電話機は超短波で、通達距離は7~8kmで不安定。92式は短波。93式は超短波で電話電信兼用。また、飛行機用の無線電話機も各種使われた。
- ②レイテ沖海戦で志摩部隊旗艦「那智」の通信諜報係亀田重雄少尉(ハワイ二世、明大卒)は、敵の攻撃機群とその母艦との交話に割り込み、「日本の空母機群われを攻撃中、ただちに攻撃をやめ母艦に帰れ」と偽交話に成功した。

連載

海外の戦跡めぐり (17) バターンの戦闘 フィリピン共和国

運営委員 佐藤宗達

20世紀に起きた大きな戦争は、何らかの破壊的な誤算が誘因となって発生することが多かった。1914年、中立国ベルギーに侵攻したドイツは、英國が同国を守るために参戦してくるとは予想していなかった。ソビエト連邦のスターリンも41年、ヒトラーが侵攻してくるとは思ってもいなかった。日本と米国も、互いの意図と対応を何度も読み違えた末、日本による真珠湾攻撃で開戦するに至った。50年に始まった朝鮮戦争では、米国は中国が参戦してくるとは想えていなかった(2017.9.7 日本経済新聞記事)。

1942年4月フィリピンでも大きな誤算がありました。1941年12月24日フィリピンの防衛の任に当たっていたマッカーサーはマニラの無防備都市宣言を行いマニラから撤退、バターン半島とコレヒドール要塞に立てこもった。日本軍はバターン半島進攻で捕虜は2.5万人と予想したが1942年4月9日バターン半島を占領すると米比軍の捕虜は7.6万人にのぼり、加えて戦火を逃れて避難してきた難民も多数おり、この捕虜の人数の誤算が「バターン死の行進」の悲劇になった。

日本軍はバターン半島のマリベレスからオドネル捕虜収容所まで約120kmをその半分程度は鉄道とトラックとで運ぶ予定であったがトラックの手配ができずマリベレスからサンフェルナンド駅までの約83kmの距離を3日間、1日平均14kmを炎天下、日本兵の監視の下で歩きました。日本軍は充分な食料と飲料水を提供できず、米比軍の兵士の多くは戦傷やマラリア・デング熱・赤痢等で歩行困難な状況であり、難民も極度に衰弱しており、死者は1万人以上にのぼると云われ「死の行進」と呼ばれた。

1966年フィリピン政府は日本軍と戦ったフィリピンとアメリカの兵士の勇敢さを称え追憶のためにバターン半島の激戦地:ピラールのサマト山に国立神社(SHRINE OF VALOR MEMORIAL CROSS)を建立1970年完成しました。山頂には大きな十字架が建ちその下には博物館があり当時の資料が展示されていますが交通の便が悪いのと知名度が低いので訪れる人は少ないようです。



上:十字架と博物館

下:十字架基部のレリーフ彫刻

秘話

汪兆銘の墓の跡

運営委員 佐藤宗達

汪兆銘(1833～1944年)。字は精衛。広東省出身、来日して法政大学に留学、1911年清朝の摂政醇親王の暗殺に失敗し死刑判決を受けたが、辛亥革命でかろうじて死を免れた。フランスに留学後、孫文の広州・広東政府の要人となった。蒋介石とは意見が異なり、1927年2月蒋介石と対立、国共合作武漢政府首班となつたが9月には蒋介石の南京政府に合流した。1935年11月1日南京での国民党会議の開会式のあと記念撮影時に狙撃された。瀕死の汪を助けたのは政治的立場を異にする張学良であった。1940年3月30日和平救国のため南京政府の首班(後に主席)となり日中の和平と友好を訴えたが、日本の手先となつた格好で「卖国奴」と呼ばれる事となつた。1944年3月狙撃を受けた傷が悪化したため来日、名古屋帝国大学付属病院に入院、手術・治療を受けていたが11月10日死亡した。遺体は南京に運ばれ南京の東部・紫金山の並びの梅花山に埋葬された。後々墓が暴かれることも想定してコンクリートで固められた。1945年9月墓は爆破され、1947年跡地に観梅軒が建てられ故人を偲ぶ縁とした。紫金山には孫文の中山陵があり大勢の参拝客が訪れます。梅花山は観光ルートから外れており観梅軒まで足を運ぶ人は少ないようです。なお遺族からお礼に送られた梅の木は今も名古屋大学構内に現存しております。(会報第142号ご参照)

港北今昔こぼれ話

俳優・井上正夫と日吉、そして高橋誠一郎

副会長 亀岡 敦子



井上正夫之碑

会報145号で、海軍によって寄宿舎から出された寮生は、日吉本町2丁目にある野球部とラグビー部の合宿所に、1944年夏からの約一年間、間借りしていたことを書きました。今回は、その合宿所の東隣に住んでいた、新派の大幹部であり、新しい近代劇にも積極的に取り組んでいた名優・井上正夫(1881-1950)と日吉の人々との交流について書きます。東京の劇場を拠点に活躍していた井上が、いつ頃、どのような経緯で日吉本町2丁目の広い前庭のある農家を借りて移り住んだのか、不明ですが、戦争末期だったそうです。井上は昭和30年冬に静養先の湯河原で急逝したので、日吉に住んでいたのは、5、6年間だと思われますが、地元に溶け込み、実に楽しい交流があったようです。

井上は、戦前戦中戦後と、舞台俳優としても映画俳優としても名を成しましたが、それだけに満足せず、大衆的な新派劇と、反対に理屈っぽいと敬遠されていた新劇の間に位置するような「中間演劇」を目指して、1936年に「井上演劇道場」を開き、後進の育成にあたりました。その中には、岡田嘉子・山村聰・松本克平・初代水谷八重子など当時のトップ女優や戦後活躍した俳優たちがおり、この頃から徐々に上演が困難になつた新劇の演出家、村山知義や杉本良吉らに演出の場を与えたと言われます。井上は日吉に転居した後も、その農家に「井上演劇道場」の表札を掲げておりました。

また、井上は日吉の人たちとの交流と日々の暮らしを大変楽しんだようで、何人の赤ちゃんの名付け親となりました。そのうえ、地域の祭りの余興に過ぎない芝居の台本を書き、おまけに主役まで務めたというのは驚きです。1949年に日本芸術院会員に選出されたような名優が、素人と村芝居に楽しんで出演したというのは、その人柄が偲ばれるエピソードです。井上は書家としても有名でしたが、洒脱な絵も大人気で、当時日吉駅前にあった大きな掲示

板の「住民のコーナー」に貼り出された井上の絵は、掲示期間終了後は、いつも引っ張りだこだったそうです。

急逝した井上の葬式は日吉で行われ、井上正夫の当たり役だった「大尉の娘」の一場が演じられ（娘の役は水谷八重子）たあと、チョンと拍子木が鳴っての出棺だったそうです。まるで映画の様だったよ、とは参加していた住民の感想でした。

そして1951年、井上を慕う人々の手によって、四国の青石の美しい碑が建てられました。その揮毫は、当時「日本芸術院院長」だった高橋誠一郎慶應義塾大学教授によるもので、表にただ「井上正夫之碑」、そして碑文は「嘗てこの地に井上正夫演劇道場ありき」で始まる名文です。井上正夫と高橋誠一郎の間に、個人的な親交があったかどうか不明ですが、井上への敬意に満ちたその碑文からは、あらゆる芸術に造詣の深かったと言われる高橋の人柄が、にじみ出ているように思われます。日吉の土地柄を語る碑と言えるでしょう。

新刊本の紹介

蘭信三・小倉康嗣・今野日出晴編著『なぜ戦争体験を継承するのか—ポスト体験時代の歴史実践』

(みづき書林、2021年2月 6800円+税) 運営委員 遠藤美幸

76年目の夏がやってきた。この数年、直接、戦場体験を聞く機会がめっきり減った。コロナ禍だからといいたいところだが、そもそもアジア・太平洋戦争に従軍した兵士の大半が鬼籍に入り、存命でも健康上の理由などで話を聽ける状況ではなくなつた。さらに、戦時に子ども時代を過ごした方々の疎開体験や空襲などの被災体験を直接聞くこともそろそろままならなくなつてきている。

世界情勢が激変するなか、私たちはアジア・太平洋戦争を体験した＜当事者なき時代＞を迎えるつある。そのようななか、非体験者による戦争体験の継承は可能なのか？もつといなれば、そもそも私たちはなぜ戦争体験を継承しなければならないのか？戦争体験者の口から語られる理不尽で凄惨な言葉のリアリティの前では、戦争体験の継承は自明のことだった。二度と再び戦争の惨禍をもたらすことがないようにとの切なる思いで語られる「体験談」にはなぜ？という問いは生まれなかった。

今回、紹介するこの本は、このような根源的な問題意識のもと、世代も専門も多様な研究者によってポスト体験時代の戦争体験の継承をめぐる歴史実践の意味を問い合わせ直したものである。この本は2部制になっている。第1部は「体験の非共有性はいかに乗り越えるか」がテーマ。6人の研究者が様々な継承活動の実践を分析している。いくつか紹介しよう。編著の一人の小倉康嗣は、広島市立基町高校美術部員が被爆体験者からの聞き取りをもとに「原爆の絵」を完成させる過程を丹念に追う。高校生と被災者の根気強い対話が絵画となり、非体験者による継承の成功例として紹介している（第1章）。一方で、継承には様々な転轍も生まれる。元兵士らの戦友会に怪しげな非体験者が参入し、彼（女）らの恣意的で浅薄な戦争理解により、継承が戦友らの思うようなものにならずに戦友会そのものが「変質」し、存続そのものが危ぶまれる（第3章；遠藤執筆）。あるいは、非体験者の作家が「特攻」を題材に創作文学を生み出す過程で、特攻の生き残りの「負い目」よりも「生かされた意味」や「使命」にテーマが置換えられることで、体験者不在の継承が生じている（第4章）。

第2部は、「平和博物館の挑戦」がテーマ。靖国神社遊就館から広島や長崎の原爆資料館をはじめ多彩な15館を紹介する。学芸員や研究者が従来の案内ガイドを超えた継承をテーマに執筆し、高い評価を得ている。巻末の平和博物館関係研究文献リスト（2009年～2019年）は圧巻で、ぜひ手元に置いておきたい。

さて、冒頭の問いかが、本文中には様々なヒントはあるが、実は明確な答えが用意されているわけではない。だからといって落胆しないでいただきたい。非体験者である私たち一人ひとりが、問い合わせし、考え続けることが「なぜ継承するのか」の答えそのものになると思うからである。

聞き取り

特務艦浮島丸乗組み元電信兵 小野寺和一さんのお話
—敗戦後に朝鮮人帰国者を乗せたまま、舞鶴港入口で

機雷にあたり沈没— 運営委員 山田譲 記

2019.10.14. 大倉山ガストにて 聞き手: 喜田、小山、
佐藤宗達、山田淑子、山田譲

() 内は山田による補記

①高等小学校卒業後、14才で海軍特別年少兵に志願

14才で海軍特別年少兵に志願しました。採用試験結果は甲の上でした。航空志願だったので、これなら航空にいけると思っていたら、第2志望の無線に回されてしまいました。昭和18年9月1日に海軍に入隊し、横須賀(久里浜)通信学校に入りました。

秋田の生まれで昭和4年(1929年)1月1日が誕生日です。それで和一という名前になりました。9人兄弟で男5人、女4人、その三男でした。7才で小学校に入学し高等小学校2年で卒業しました。クラスは男女別の2つで、1



小野寺和一(わいち)さん

クラスが50~60人でした。

家は秋田市ですが街中ではなく太平山の下で、お菓子屋でした。親は自分に継がせたかったのですが、自分が海軍に行くというので仕方ないとなりました。自分は戦争が始まったばかりだったので、軍隊にあこがれていました。どうせ兵隊に行くのなら早く行った方がいいと思いました。その方が早く階級が上になります。海軍に行ったのは、ヘビが嫌いなので海にはヘビがいないと思ったからです。

入隊して3ヶ月は新兵教育で走らされました。バッター(「海軍精神注入棒」で殴打)の制裁をやられました。カッター訓練は一番きつかったですね。班の中では背が高い方だったので、漕ぎ手の予備に回されず常に漕がっていました。鉤のついた棒で叩かれました。モールス符号などは入校前に本を送ってきたので、先に覚えていました。3ヶ月の新兵教育の後は専門教育で昭和19年6月に卒業しました。

②哨戒艇の母艦として浮島丸で電信兵勤務

その後の配属先が浮島丸でした。大阪商船の乗客600人の客船(4730トン)です。特務艦として使われ、山下桟橋が基地でした。カツオ船を転用した見張り船(哨戒艇)20隻を太平洋に展開していて、その母艦でした。食料、燃料を見張り船に補給します。大阪商船の船員も軍属として少し乗っていましたが軍人の方が多かったです。乗員は全部で2~300人いました。船内で食べ物には困りませんでした。銀シャリでおかわりは無でしたが、肉もありました。

見張り船の母艦は3~4隻いました。各隊に見張り船は30~40隻いて、交替で出航します。見張り船に乗っているのは軍人と漁師が半々でした。とった魚をもらったこともあります。漁船ですが軍艦旗をつけていました。浮島丸が太平洋にいた時、爆撃されて至近弾で船体に亀裂が入ってしまいました。何とか応急でふさいで、3日かけて横須賀に帰ってきたこともあります。

無線機は海軍のものを使っていました。通信兵は20人位で3交替か4交替でした。そのうち暗号兵は5~6人。受信機は3~4台で送信機は2台だったと思います。送信は専門の人がいました。受信する通信相手は決まっていました。司令部との通信をしていて、山下埠頭の先のホテルか何かにその戦隊司令部がありました。東京通信隊とは通信しませんでしたが、敵潜水艦情報の放送は受信していました。見張り船は米軍の軍艦や飛行機の動きを通報します。その電信が来たら受信して暗号兵に回します。平文で来ることもありました。しかし居眠りしてしまうこともあって、それでも電信だけは書き取っていましたが、後先がわから

らなくなってしまいました。そうすると呼ばれて「ちょっと来い。間違えてないか?」と聞かれました。居眠りしていたとは言えないので「間違えありません」と答えると、「そうかあ? 潜水艦が山の上にいるぞ」と言わされました。相手は暗号兵でしたが同じ階級で2~3才年上だとやさしく言ってくれました。

① 浮島丸は輸送艦となり米潜水艦、敵機とも攻防

昭和20年5月からは浮島丸は輸送艦になり、大湊(青森県)が母港になりました。大湊に行くとき宮城県沖から海防艦か何かの小さい軍艦が護衛につきました。しかし岩手県宮古沖の山田港の先で、その護衛の軍艦が、浮島丸の陸側にいたのに陸側から米潜水艦の魚雷を受けてやられてしまいました。次に自分の船が狙われましたが、魚雷はモーターボートのように(白い航跡が)目で見えるので、何本もかわしました。そのあと山田港に逃げ込みました。魚雷は先に見つけければ怖くありません。見張り員はマストの上や船の両側にいます。太平洋にいた時も潜水艦に攻撃されました。夜の間は向こうもこちらが見えないので怖くありません。大湊に着くと第2海上護衛隊所属で、無線系統も大湊警備府の管轄でした。

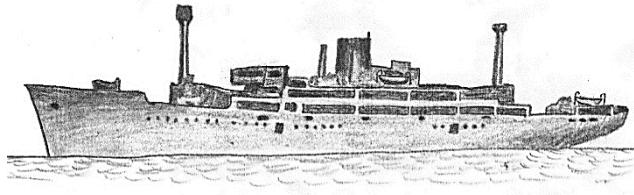
千島の方に2回行きました。10隻行って3~4隻帰って来ればいい方でした。エトロフ島だか何だかに補給に行って人を乗せて帰ってきました。その時は途中で敵飛行機は来ませんでした。しかし港で爆撃されたことはあります。15センチの明治時代の古い大砲をメクラ滅法に撃つたら当たったのです。それで助かりました。大砲は3門くらいありました。後で機関砲に取り換えました。アメリカの潜水艦が浮上して大砲を撃つてきました。撃ち合いましたが、こちらの弾がとどかない。向うの弾が上を飛んでいきました。撃つてくる弾は見えました。横向きだと見えません。通信兵は非番だとやることがないので、この様子を見ていたら怒られました。

④ 終戦後、機雷に当たって船は沈没、助かって帰郷

終戦後は青函連絡船の代わりを1~2回やりました。その後、青森付近にいた朝鮮人を乗せて「釜山に行け」と言わされました。しかし、みんなは「戦争が終わったのにいやだ」と言いました。みんなすぐに帰郷するつもりで荷造りしていたので、港の知り合いの家にそれをあずけてありました。それなのに1~2日後に「何が何でも釜山に行け」と言わされました。大湊から偉い将校が日本刀を持ってやってきて、抜きはしませんでしたが脅かしました。乗せた人数は、朝鮮人3700人位でした。8月22日の夜11時に出航しました。

アメリカの潜水艦に攻撃されると危ないので、海岸寄りを航行しました。ドカンとやられても陸に近い方が助かるからでした。明け方に秋田沖を通り田舎の山が見えたので、飛び込もうかと迷っているうちに通り過ぎてしまいました。佐渡島と新潟の間を通った後、「100トン以上の船は、夜は港に入れ」とGHQの指令があり、どこの港に入るのかと思っていました。舞鶴は大きい港で「機雷掃海済み」と言わされたので、入港しようとしたらドカンとやられてしまいました。(8月24日の夕刻のこと。B29が港湾封鎖のため投下した機雷に触雷したらしい。)

自分の班はその時は風呂当番で、風呂を沸かして入っていたらドカンときて、自分は空中に浮かんだが後は覚えていません。気がついたら倒れていきました。風呂を飛び出しましたが素っ裸だったので、手ぬぐいと紐を拾って下を隠しました。甲板の通路でズボンを拾って、それをはきました。船が傾いて、高い方の側に行こうとしましたが滑って海に落ちました。救助の船は高い舷側の方に来て、飛び込んだ人を救助していました。自分も助けられて班長もいっしょでした。陸に上がってケガをしている班長を担架に乗せました。「オマエも担架に乗れ」と言わましたが「大丈夫」と言って、いっしょに走ってきました。膝のお皿の横にひどいケガをしていて病院でそれに気がついたら、その後、歩けなくなってしまいました。機関科の人はエンジンが船底なので逃げられなくて死んでしまいました。無線の人も1人、泳げない人が死にました。無線室は上甲板のひとつ下で、自分の居住区は窓はあります



浮島丸

4.

たが吃水のあたりでした。そのあと舞鶴にいても自分の船がないから、いる所がありません。GHQが来るというので引っ張られるとイヤなので早く家に帰ろうと思い、ケガを縫った糸を抜糸しないまま、家に帰りました。艦長が「帰れ」と言ったのです。後で自分で抜糸しました。自分は最後には兵長で、終戦後に二等兵曹になりました。その時はまだ16才でした。

⑤戦後も1年間、乗船して機雷掃海作業

戦後も船に乗って1年位、沖縄などで機雷の掃海をしていました。鉄でできた小さな船で木製ではありませんでした(掃海艇は磁気機雷をさけるために木製が多い)。海防艦みたいな船でした。その後、田舎に帰って警察の無線をやりました。自分は上の学校に行きたくて、東京に行きプラスチックの町工場で働きました。津田塾(渋谷区千駄ヶ谷の英語学校)で英語を習おうと思って通っていたら、残業をしないので「仕事か勉強か、どっちかにしろ」と言われて津田塾をやめました。その後、いろいろと会社を変わって住み込みの仕事もしました。いろいろ苦労しました。

祐天寺の朝鮮人戦争犠牲者追悼会には10年以上、行っています。新聞か何かで見て、行くようになりました。あの時、死んでいたら、祐天寺で遺骨になっている人たちと同じようになっていたと思うので、毎年行っています。当時、浮島丸に乗っていた人で今、生きているのは自分だけだと思います。(目黒区の祐天寺には、浮島丸の朝鮮人犠牲者の遺骨が今も納骨堂に残されています。)

活動の記録 2021年6月~8月

- 6/18(金) 会報145号発送 (来往舎 小会議室)
- 6/19(土) PowerPoint作成チーム会合 (日吉地区センター 別館)
小学校出前授業用のPowerPointの作成
- 6/29(火)・7/1(火) 慶應義塾大学設置講座「日吉学」 研究発表を傍聴
(来往舎 シンポジウムスペース)
- 7/1(木) 運営委員会 (来往舎小会議室)
- 7/17(土) PowerPoint作成チーム会合 (日吉地区センター 別館)
- 7/22(木) ガイド学習会 (日吉地区センター 和室)
- 8/7(土) PowerPoint作成チーム会合 (日吉地区センター 会議室)
- 8/13(金) 地下壕見学会 慶應義塾普通部 生徒1名 先生12名

○地下壕見学会について

夏休みの自由研究等、地下壕見学のお問合せをいただいています。

新型コロナウィルスの感染状況下、一般の方の地下壕見学会は再開未定です。慶應義塾関係者の少数の見学は、感染対策をしながら実施しています。

★お問合せは見学会窓口まで

Tel/Fax 045-562-0443 喜田(午前・夜間)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 Tel 045-561-2758

(見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 Tel 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 阿久沢 武史 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会